

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	馬鐵林の人生観：論説
Author(s)	高木，敏雄
Citation	龍南會雜誌， 9 4： 1 - 9
Issue date	1902-10-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5372
Right	

龍南會雜誌第九拾四號

論 說

馬鐵林の人生觀

教授 高 木 敏 雄

論

馬鐵林とは誰ぞ。

白耳義騷壇の明星、新派の驍將、詩人、哲學者。

本國に於ては勿論のこと、巴里の文藝雜誌は、その作を評し、龍動の日刊新聞は、その劇詩の翻譯を掲げ、獨逸の劇場には、その悲曲の演ぜらるゝを見んとて、觀客の集るもの數千。實に歐羅巴近來の流行兒、世界文學最近詩壇の光彩。知るもの、知らざるもの、共にその名を語る。獨り歐羅巴の文壇に於て、かくの如きのみは非ず。大地の大塊を隔て、靴底と麻裏と正に相對するところ、五尺の體軀、三寸の頸、三寸五分のカラアの雪の如きに、蒼白き無髯の頰を載せ、帽はバナマの新形たる可く、背廣は派手なる大柄の縦横縞たるべし。顏面の傾斜、凡る六十五度。鼻の高さは、上野公園の大本をも凌がんとす。尙一人、同じく東都文壇の當世氣質、洋行歸りの紳士。詩人としての馬鐵林は、既に此等の人々によりて、吾文壇に紹介せられたり。されど、それは唯此天才の一面のみ。その高遠博大なる思想、幽玄神秘なる人生哲學は、悲しき哉、世の人未だ之を知ること、詳ならざるを憾む。

說

回顧すれば、既に數年。この青年詩人の流麗婉美なる文辭と、自家獨特の幽玄神秘なる劇詩と、内外の驚嘆を起し、批評家の老練なる健筆、之れが爲めに蹟をたしこと、再三再四。時移り世改まりて、第十九世紀は、數字の争を残して去り、今や第二十世紀の新天地となりぬ。時は絶大無限の勢力、その作用は、極めて遅々緩慢なるが如くして、而も容易に侮る可からず。僅々數年、唯數年のみ。三年とするも可、五年と數ふるも亦た可。この間、この詩人の内面的生活に於て起りたる進化、その思想の變轉、誰かその著るしきを見て、驚かざらむ。俗人の彼に對する渴仰尊崇は、既に多少の影響を免かれざりき。批評家の彼に對する態度も、漸く一定するに至らんとす。馬鐵林いま、年齒正さに四十。前途尙ほ春秋に富む。もし往を以て、來を推さば、その將來の造詣、思ふにまさき、計り知る可からざるものあらむ。誰か豫めこれを卜するを得む。今日の馬鐵林は、詩人として偉なりしよりも、思索家として、尙遙かに、大ならむとするものゝ如し。

混亂、紛擾、朝に甲に従ひ、夕に乙に聽く。昨日是とせしもの、今日これを非とす。今日の天使は、將さに明日の惡魔たらむとす。輕舉盲動、輕躁浮薄、信すること速かに、飽くこと疾し。嘆き可き哉、現時の人の志操の定まらざる。悲しむ可き哉、當今の思想界。曩きにトルストイの極端なる博愛主義に謳歌せしもの、後には狂才ニイチエの博大なる超人の説に渴仰し、今やまた、ゴルキイの大膽なる野蠻人的放浪主義に、隨喜の涙を流しつつあり。永遠の動搖、恒久の變化、暫くも止ることなきは、此また一種の啓發なる乎。進化といはんか、退化と名けんか。走馬燈の回轉、百鬼夜行の大バノラマ。

この時に當りて、此天才の穩健着實なる人生觀を紹介するは、蓋し無益の事業に非ざる可し。

詩人曰哲學者。或評家は、馬鐵林を評して、かくいへり。宜なる哉、評家の言。

馬鐵林のはじめにものせし文學的妙什佳篇は、其の後に草せし、人生哲學的述作を離れては、これを理解すること難し。この故に、彼の人生觀を窺ふことは、彼の劇詩を賞翫せむとの、志ある人々にとりても、亦避く可からざる條件たるなり。「フハウスト」の巨篇を讀まむとの、志あらむ者は、先づ、大詩聖ゲーテの傳記を繙く可し。シラア晩年の詩文を、咀嚼玩味せむとの、志あらむ人は、宜しく先づ、哲學者としての彼の思想をたづぬ可し。こは普通の道理にして、何れの眞詩人に就ていはむも、同じことながら、茲に述べむとする、馬鐵林の場合に於て、特にその然るを覺ゆ。

即ち、詩人哲學者。宜なる哉、評家の言。

茲に少しく、文學者としての彼を説かむ。

馬鐵林、その實の名は、モオリイス、マアテルリンク。第十九世紀の半を過ぐること十一年、白耳義國の一小都府ブリュッシュに生る。時に一八六二年、普魯西の憲法問題のはじまりしも、この年。那威の詩人イブゼンが、「愛の喜曲」を草せし年。露西亞の詩人ツルゲチフが、「父と子」を公にせし年。普佛戰爭の破裂に先つこと、僅かに數年、歐羅巴の文界、一般に靜寂にして、未だ新氣運の勃興を、見るに至らず。トルストイ尙ほ、活動をはじめず。ニイチエは、未だ云ふに足らぬ。ルナン、ゴンクウル、ゾラの徒、未だ歐羅巴文壇の大勢力たるに至らず。

靜なる年、靜なる都府。從てまた、靜なる人乎。

然り。豈然らざるを得むや。境遇の感化は、實に侮るべからざるものあり。

聰明の才、堅實の資。深沈平靜にして、而も憂鬱に流れず。精神つねに清爽、胸中無限の天地には、絶えず温和なる春光の、熙々として輝くあり。その心眼は、八面玲瓏として、一點の曇りもなく、難然たる身邊の萬物を放れて、常に内面の心靈界に向つて輝き、外界の喧囂騷擾も、毫も内面の調和を攪亂すること能はず。都人士の輕躁に遠かること、猶かの靜かなる都府の、大都府の喧囂に類せざるが如く。現象世界に獨歩して、宛ら鷄群の孤鶴の如く、塵世の歡樂を求めず、名聞利達を希はず。高潔なる人物、清廉なる操行。その人物性行の、所謂近世的人士の流に異なること、かくの如く甚しきが如く、その錦心繡腸に染めなし、文學的作品も、また世に稀なる珍しき趣を示めせしかば、そのはじめて、文壇に現はるゝや、毀譽褒貶雨の如くに、作者の身邊に積集しぬ。或者は、一顧の價值なしとして、之を笑ひ、嘲り、罵り、且つ誹り、或者は空前の神品妙什として、之に向つて、限りなき稱讚の辭を捧げぬ。批評家の狼狽、讀書社會の昏迷。暫くの間は、爲めに世評の一定を見る能ざりしといふ。數年を経て、馬鐵林みづから、已れの詩的述作に、註疏を加ふるに至りぬ。これ蓋し、必要己むを得ざるに出でしなり。

文學者としての馬鐵林は、悲曲作者なり。一八八九年、詩人二十七歳のとき、はじめて劇詩「王女マレイヌ」を草しぬ。彼の高想詩才は、この時漸く圓熟の境に達し、其翌年より一八九四年に至る五年の間に、七篇の悲曲を作爲して、之を公にするを得たり。後一年を隔て、一八九六年即ち詩人三十二歳の時、馬鐵林のはじめの哲學的著作いづ。題して「恭謙の徳」といふ。この書出づるに及んではじめて、一般讀書界は、かの悲曲の意味と目的との、何邊に存せしやを、了知するに至りぬ。かくて、世評は漸く一定しぬ。彼を賞讃するもの、彼の作に渴喜隨仰する徒、漸く其の數を増しぬ。

されど、此時既に、馬鐵林の思想は、更に一段の進化を経て、後の哲學的著作となりて現はれぬ。題して、「至上智と人間の定命」といふ。

馬鐵林は、一個の世界觀を立て、之をはのめかさむとの目的にて、かの悲曲を作爲し、自家獨特の理論を立てたれども、共に不自然に陥りたり。蓋し馬鐵林の悲曲をして、不朽ならしめむものは、かの世界觀、或は人生觀にして、此の理論にはあらざるなり。

されば、馬鐵林がその悲曲に於て、描き出たす世界の、他の劇詩家のそれと、同じからざるは、怪しむに足らず。或時は、何處とも定め難き、童話の世界、無何有郷。また或時は、日常生活の世界。曲中の人物は、常にその輪廓朦朧として、捕捉し難し。影の如く、幻の如く、霧の如く馬鐵林は、近世の劇詩家のすなる、心理的描寫によりて、曲中の人物に、個人性を賦與することなし。蓋し現時の特色たる、内面の破綻を發き、胸中の苦悶を描き、あるは烈情相闘ひて生ずる葛藤を寫すが如きは、作者の目的に非ず。作者は、近世の自然科學を輕視し、その研鑽の結果を無視せむと欲す。從來の劇詩術の總ての方法を、捨てゝ顧みざらむと欲す。彼は之よりも、尙一層單純にして、尙一層深遠なる事物を描寫せんと欲す。風荒く波高き情海を去りて、底深く水清き心靈の海に、その筆をひたさむと欲す。その悲曲の目的は、人をして、避け難き宿命の怖るべきを、悟らしめむとするに在り。然らば、一種の傾向劇乎。然り純乎たる傾向劇なり。

馬鐵林思へらく、人間の一生、寔に憐むべき哉。蜉蝣の如くにして、朝に生れ、夕に死す。遂に人生の何たるやを悟らず。憐む可き哉。唯、人生の重荷を負ふて、長途の旅に疲れたる、白頭半死の老翁、或は兩眼明ならずして、色彩の世界を知らぬ盲者の如き、僅かに、眞生活の意義を、悟るこ

とを得む。多くは、心眼盲にして、死の面前に近き迫れるをも、知ること能はず。憐むべき哉。馬鐵林は、二個の題目を捉へて、自己の人生觀を説かむとす。死、或は運命はるの一。愛はるの二。七篇の悲曲の中、はじめの題目を捉へて、運命の恐るべきを、示せるもの五。後の題目を捉へて、愛の勢力の侮り難きを、示すもの二。思へらく、愛もまた、一個の運命なる乎。情熱の激動は、盲目にして、みづから己れの目的を、覺知することなし。吾等は、唯これに盲從するのみ。從て吾等に罪なし。

知るべし、悲曲作爲時代に於ける馬鐵林は、純然たる宿命論者なるを。馬鐵林ははじめに於ては、かくの如く、厭世的宿命説を信じたりしかば、その悲曲中の人物も、凡て運命の玩弄物の如く、絶大無限の力に對して、殆んど何等の爲す所を、知らざるが如し。されど、今日の馬鐵林は、昨日の馬鐵林に非ず。るの思想は、既に一段の進化を經ぬ。厭世的宿命説は、既にその信する所にあらず。彼は人間の自由を信ず。從てまた、行爲は人間の義務なりと信ず。唯るの性格の根本に於ては、少しも、變化せし跡なきのみ。るの神秘的傾向は、依然たり。心を潜めて、自己内面の心靈界の幽微を探るは、依然として、るの好む所。吾等の心靈は、神性を分與せられて、絶對無限と相關聯するの確信も、亦依然として異なることなし。

思へらく、人間心靈の本来を認識するは、人間唯一最高の職分。此認識によりて、吾等は至上智と真正唯一の幸福とに、達するを得べしと。純乎たるる現世的幸福説。人間思想の變化、寔に驚く可き哉。輕躁なる者よ、暫く爾の變節呼はりを止めて、此變化の跡を、審かにせむことを勉めよ。

純乎たる厭世的宿命論。純乎たる現世的幸福説。

天の一方と地の一角。南極と北極。極端と極端。如何にして、厭世的宿命論者なりし馬鐵林は、數年の間に、現世的幸福説を信ぜるに至りし乎。此變化は、如何にして可能なりし乎。

吾等は先づ、はじめに溯りて、馬鐵林の厭世的宿命説をたづねむ。

馬鐵林思へらく、心靈は唯一眞實の世界にして、茲に無限と接す可く、茲に幸福を求む可し。されど、心靈の認識は、官能によりて、得可からず。理性によりて、達せらる可からず。此二つは、却て之を妨ぐるの具たらんのみ。然らば、この認識に達するの途如何。

人間の一生中、心靈の直觀は、唯極めて罕なる場合に於て、可能なるのみ。深山の幽居は、この直觀を得るの途に非ず。長夜の冥想は、この認識に達するの道に非ず。日常生活のありふれたる事の起れるころ。却てこの直觀を得るの機會なれ。暖き接吻。うれしき涙。圖らざるに、人の死せる。思はざるに、人の可笑しき面持したる。何れか、心靈の自覺、心靈相互の直觀の、得難き機會にあらずとせむ。かゝる際に於て、吾等の心靈は、勿焉として、内面の神靈を認識す。これ等の瞬時の集り重りたるもの、はじめて人間の直生涯を作るものぞ。人性の直なるも、善きも、將た美しくしも、唯日常生活に於て、見るを得可く、眞正の悲劇は、日常生活の中にこそ、存するなれ。人間の存在は、即ち眞正の悲劇、外界の事物の爲めに、心靈界の平和を攪亂せらるることなくして、能く人間眞生活の、眞の認識を、得たるものゝみ、この悲劇の眞相を看破し、避く可からざる宿命を、見ることを得む。宿命は全能なり。宿命の力は、絶大無限なり。隣むべき哉、宿命の鐵鎖に繋がるゝ人間。人間の微力は、時に宿命の打撃を、豫知するを得む。されど、その車輪の運轉進行は、

之を如何ともする能はず。總ての宿命は、不祥なり。之を馬鐵林の、思想進化の初期に於ける、厭世的宿命論とす。

この思想の次第に進化して、自由の概念と相調和し、遂に幸福説を生むに至るまでの、開展變化のはじめの萌芽は、「恭謙の徳」に於て、これを覓ひるを得可し。

吾等が内面の神靈を、認識し得る徴證をして、馬鐵林は三個の事實を數へぬ。曰く直觀、曰く同情、曰く反情。既にしてまた、説を立て、曰く、善は人の性、愛は人の心。吾等は、これによりて、徳に進むを得む。道德的圓滿の理想。新らしき人生觀の萌芽。

既にしてまた、自ら問ふて曰く、抑も宿命とは、果して何物ぞ。宿命と吾等との關聯、はた如何。答へていはく。宿命は、吾等の内にあり。吾等の外に、在ることなし。かの厭世的宿命説に、遠かる論なり。馬鐵林また、宿命に一個の別あるを説く。能動的宿命、被動的宿命。はじめのものは、吾等時に之を避くるを得む。後のものは、如何とも爲し難し。能動的宿命の説と、厭世的宿命説とは、並び立つを得ず。馬鐵林が、かく説くに至りしは、厭世的宿命説を信ずることの、漸く冷かなるに至りしを證す。亦思へらく、人の性は善なり。善なるが故に、吾等は善に進むを得。吾等が善に進むを得るは、吾等の心靈の神性を賦與せられたる徴證にして、吾等は之によりて、幸福に進むを得可し。

馬鐵林は、その著「恭謙の徳」に於て、かくの如く説きぬ。卷末に近くに従ひ、現世的幸福の可能を信ずるの傾向、次第にその甚しきを加へ、遂に斷乎として、宿命の全能を疑ひ、人間の道德的自由を認め、宿命に對して、人間の全然自由なるべきを、唱ふるに至りぬ。吾等は、自己の心靈を、

認識することによりて、天堂の門を開くを得べし。されどこは、不斷の精進力行によりて、はじめて達せらるべく、基督の所謂心の清らかなる者に非ざれば、この天福を享くこと能はず。馬鉄林が、この論文集に題して、「恭謙の徳」といへるもの、蓋し此旨を注のめかせるなり。

馬鉄林の現世的幸福説は、その後の哲學的著作「至上智と人間の定命」に詳なり。この書は、彼の幸福説の福音なり。余は更に、題を改めて、特に此説に關して、述べむことを期す。願くば、引續き次號に於て。

和漢交通起原（承前）

教授 武藤 虎太

第二章 倭人時代

東夷の堯舜時代に於ける。既に前述の如し。是より厥後夏后氏太康政を失ひ。桀暴逆を逞くし。諸侯内に侵し。蠻夷外に背た。殷湯の革命。一旦平定に歸したるも。仲丁に至ては藍夷寇を爲し。武乙衰弊して東夷寢盛に。終に淮岱に侵入するに至れり。周武己に紂を平げ。箕子を朝鮮に封し。平壤に都せしむ。武王の意蓋し敬して之を東偏に遠ざくるに在りと雖も。一には義和以來。既に此に宅りし故事に由り。二には此に封して。東夷の鎮と爲さんと欲せしや知るべからず。朝鮮既に禮義田蚕八條の教を布て。版圖内に入りし上は。對岸の日本。亦通交の範圍を脱する能はざるべし。王充の論衡に曰く

周時天下太平。越裳獻白雉。倭人貢鬯草。增儒篇
成王之時。越裳獻雉。倭人貢暢。倭國篇